様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４年　６月　１日現在

機関番号：12603
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：21652063
研究課題名（和文）　高大連携による大学における新しい東南アジア教育モデルの構築
研究課題名（英文）　Building a new model for teaching Southeast Asia to undergraduate students through university-high school cooperation

研究代表者
青山　亨（AOYAMA TORU）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：90274810

研究成果の概要（和文）：高校の地理・歴史教育にかかわる教員と大学で東南アジアについての学部教育を行う教員による研究会を定期的に開催し、学部での東南アジア教育が直面している諸課題について、教科書の内容調査、教員へのアンケート調査、事例報告などを通じて共同研究をおこない、その成果をシンポジウム等で報告するとともに、東南アジア史に関する基本用語集案の作成および学部初年次を対象にした東南アジア教育のモデル・カリキュラムの構築を行った。

研究成果の概要（英文）：Regular meetings with high school geography and world history teachers and university lecturers in charge of teaching Southeast Asia to undergraduates were held to locate problems that the undergraduate education about Southeast Asia is facing through the survey of textbook contents, questionnaires to lectures, and case study reports. The results of the meetings, some of which were reported at symposia and other seminars, include a draft list of basic words for teaching Southeast Asian history and a model curriculum of Southeast Asian studies for first year undergraduates.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 600,000 | 0 | 600,000 |
| 2010 年度 | 600,000 | 0 | 600,000 |
| 2011 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1,900,000 | 210,000 | 2,110,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：東南アジア史、東南アジア教育、高大連携、カリキュラム開発、社会科教育

## １．研究開始当初の背景

近年、東アジア共同体の構想が今まで以上に現実性をおびて語られ始めている。将来の構想としての政治的・経済的な提言が出されるにとどまらず、歴史的・社会的事象としての東アジア共同体への学問的な関心も高まっており、その語られ方は多様になりつつある。その場合、東アジアという対象には、日本・朝鮮半島・中国などの狭義の東アジアはもとより、タイ、ベトナム、インドネシアなどの東南アジア、さらにインドを中心とする南インドを含む広がりをもっているが、多くの場合、新興成長国家である中国とインドに議論の焦点があてられる傾向にある。

しかしながら、日本に住む私たちが今後、東アジアの安定と調和のとれた繁栄を志向

するのであれば、これらの近い将来の大国にのみ関心を向け（その重要性はもとより否定できないことだが)、東南アジアという中堅国家群からなる地域への関心を失っては、東アジアへの認識についてバランスを欠くことになるであろう。なぜなら、古代・中世から 20 世紀にいたるまで日本と東南アジアは海域を介在とした隣接地域として深い関係をもってきたし、国際的な地域連合として堅実な成功をおさめている東南アジアは、今後も東アジアにおいて、巨木を支える太い根っこの役割をもつからである。したがって、東アジアに位置する日本に住む私たちすべてにとって、東南アジアに関する知識と理解は今後も必須の条件と言ってよい。

しかるに、現在の日本の大学における教育は現状に十分に対応しているとは言いがたい。問題の根幹にあるのは、1) 東南アジアについて関心をもつ学生の減少、2) それに対応する東南アジアについての教育方法論の未発達であり、この二つの要因は悪循環をおこしている。これらの問題を解決するためには、大学における東南アジア教育のあり方を再検討することはもとより、高校における世界史・地理・現代社会などの社会系科目における東南アジア教育のあり方についても再検討する必要が求められる。

本研究の青山と桃木は、日本の東南アジア研究者を結集した東南アジア学会に 2006 年に設置された教育・社会連携担当理事としてこの問題の重要性を認識してきた。とくに桃木は、その最初のステップとして高校における東南アジア教育と大学の東南アジア研究の交流をはかって、大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」＜世界システムと海域アジア交通＞班の代表として高校教員などと連携して研究会を開催してきた。その成果は、2008 年 6 月の東南アジア学会第 79 回研究大会のパネル「東南アジア地域研究と高大連携：高校で東南アジアはどのように教えられているか」に結実した。この中から、東南アジアに関する教育をめぐって、専門家のいない大学と専門テーマに特化する一部大学との差、そして、東南アジアの位置づけに苦慮する高校と大学との視点のずれが明かとなった。これらの課題の存在が本研究開始の背景である。

## ２．研究の目的

本研究は、日本における東南アジア研究者の最大の学術団体である東南アジア学会のプロジェクトの一つとして推進するものであり、本研究の成果は学会を通じて大学の教育現場に還元される。また、高大連携のネットワークを通じて高校での教育のレベル向上も期待される。結果として、日本における東南アジア教育の水準の向上、ひいては日本に住む私たち一般の知識・理解の底上げにつながる。むろん、底辺の拡充・底上げは将来の専門家養成にもつながるものである。具体的には、以下の 2 点を目的とする。

（1）東南アジア教育にかかわる大学教員と地理・歴史教育にかかわる高校教員のネットワークを形成し、共同研究のなかで情報の交換・共有をすすめることによって、大学と高校の間の視点のギャップを埋める。

（2）高校での東南アジア教育の実情をふまえて、大学での教養教育と専門教育の 2 レベルにおいて新たな教育モデルを構築する。

## ３．研究の方法

本研究の事業は中核的事業、基礎的事業、総括的事業の 3 点である。

（1）中核的事業では、高大連携のネットワークを形成し、共同研究会を開催する。共同研究会では、大学の研究成果の還元と高校における東南アジア教育の実状報告を主たるテーマとし、その成果はウェブ上で公開する。

また、大学における教養教育レベルおよび専門教育レベルの教育モデルの構築をおこなう。教養教育レベルの教育モデルについては、東京外国語大学において試行的に立ち上げ、捗状況は共同研究会において報告する。専門教育レベルの教育モデルについて、大阪大学を中心に、社会・人文系を横断したモデルのアウトラインを検討する。進捗状況は共同研究会において報告する。

（2）基礎的事業は、中核的事業と並行しておこなわれる事業で、中核的事業をすすめるにあたっての基礎的な情報インフラの構築・運営および情報の収集などをおこなう。

本研究にかかわる情報の発信・共有のためにメーリングリストとウェブサイトを立ち上げる。初年度の独自の基礎的事業として、日本の大学で開講されている東南アジア関係の授業の実態についてアンケート調査を実施する。

（3）総括的事業は、各年度末におこなうフォーラムないしシンポジウムであり、各年度の総括をおこなう。とくに最終年度は計画全体の総括をおこない、シンポジウムの開催等による計画成果の社会還元をおこなう。シンポジウムは東南アジア学会の研究大会の一環として行い、学会会員への成果還元をおこなう。

中核的事業である共同研究会ならびに総括的事業であるフォーラム/シンポジウムの開催は、研究代表者の青山、研究分担者の桃木、中村が共同してあたる。研究会、フォーラム/シンポジウムには必要に応じて適当な講師、コメンテータを外部から招き、原則として大学教員、高校教員を主たる対象と想定した公開企画とする。

研究代表者の青山は、全体のコーディネー

トと東南アジアに関する教養教育レベルの教育モデルの構築を担当する。
研究分担者の桃木は、東南アジアに関する専門教育レベルの教育モデルの構築を担当する。
研究分担者の中村は、高校社会科教育（とくに世界史教育）の専門家の立場から共同研究会およびフォーラム/シンポジウムの開催にかかわる。

４．研究成果
本研究は、高大連携のネットワークを形成し、高大教員による共同研究を推進することによって、高校側に対しては、東南アジア研究の最新の知見を提供し、フィールドの体験を反映した、断片的でない体系的な東南アジアの教育を可能とし、大学に対しては、高校での教育事情に対応したリメディアルな教養教育レベルのモデルを構築することによって、高校・大学間の知識ギャップを克服して、高校から大学へ教育を接続する方策を提示した。
具体的には、以下の 2 点を成果として出すことができた。
（1）初年次学部生を対象とした東南アジア教育のモデル・カリキュラムの構築。これは、東京外国語大学の外国語学部において東南アジア課程教員が協力して構築した通年の授業カリキュラムであり、東南アジア課程に所属する初年次の学生に対して、東南アジアの地理、歴史、社会、文化、経済、政治に関しての基本的な知識が提供できるように設計されている。
（2）東南アジア世界史教育のための基礎用語集の草案の作成。これは、学生の進度にあわせたレベルごとに分類された東南アジア史に必要な基本的な用語集である。現在、検討されている新しい「歴史基礎」科目が創設された場合、その一部となる東南アジア史に関して、高校での教育、入試問題の作成、大学学部教育における基礎的な資料となることが期待される。
将来的には、用語集のレベルを踏まえて、モデル・カリキュラムにふさわしい大学初年次用の東南アジア教育のための教科書の製作を想定している。
本研究によって、将来の日本に住む私たちにとって必須である「東南アジア・リテラシー」を若い世代に植え付け、高度な専門性をそなえた教養人や専門人を育てることによって、これからの日本が、ありうるべき東アジア共同体の真の一員として、安定と調和のとれた繁栄のために大きく貢献することが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）
① 中村薫「日本学術会議における地理歴史科の科目改革案について―高校教員へのアンケートを中心に―」『学術の動向』(査読無）9 月号，2011 年，36-39 頁.

② 中村薫「大阪大学歴史教育研究会・院生グループ報告へのコメント―近現代のグローバル・ヒストリーをめぐって―」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発」成果報告書シリーズ 4』（査読無）2011 年，84-103 頁.

③ 中村薫「1970 年代の世界史教科書の特徴―近代の起点と文化圏を中心に―」『歴史教育史研究』(査読無）第 8 号，2010 年，1-17 頁.

④ 中村薫「大阪大学歴史教育研究会での模擬授業について―19 世紀のアジアおよび海域世界をめぐって―」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発　成果報告書シリーズ 2』(査読無）2010 年，35-41 頁.

⑤ 中村薫「小・中・高等学校の地理的分野における東南アジア学習の変遷―学習指導要領と教科書からみた東南アジア像―」『芦屋女子短期大学紀要』（査読無）35 巻，2010 年.

⑥ 中村薫「世界史教育の課題と今後への提言―世界史の構成および地歴総合科目について―」『総合歴史教育』（査読無）45 巻，2010 年，13-24 頁.

⑦ 桃木至朗「現代日本における歴史学の危機と新しい挑戦」『歴史科学』（査読無）197 号，2009 年，1-12 頁.

〔学会発表〕（計 19 件）
① 桃木至朗「高校歴史教育の抜本的改革を可能にするために大学・学界がすべきこと」北海道高等学校世界史研究会第 42 回研究大会，2011 年 8 月 5 日，札幌市教育文化会館.

② 桃木至朗「歴史教育とジェンダー―アジアから全体史を学ぶ／教える」日本学術会議学術フォーラム「歴史認識を変える－歴史教育改革とジェンダー」, 2011 年 7 月 2 日，日本学術会議.

③ 桃木至朗「日本列島北方史と東南アジア史を比較する歴史教育の試み」東南アジ

ア史学会第 85 回研究大会，2011 年 6 月 12 日，北海道大学.

④ 桃木至朗「高校教員が東南アジア史を積極的に教える気になるいとぐちはどこにあるか」岐阜県高等学校教育研究会公民地歴部会，2011 年 1 月 18 日，岐阜県総合教育センター.

⑤ 中村薫「戦後における世界史教科書の変遷―1970 年代の世界史教科書―」歴史教育史研究会第 6 回例会，2010 年 10 月 29 日，芦屋大学大阪キャンパス.

⑥ 中村薫「高校教員に対する東南アジア教育に関するアンケート調査報告と今後への提言」第 5 回高大連携東南アジア教育科研研究会，2010 年 9 月 12 日，大阪大学豊中キャンパス.

⑦ 桃木至朗「20 世紀の東南アジア史」三重県高等学校社会科研究会総会，2010 年 7 月 1 日，伊賀市ゆめぽりすセンター.

⑧ 桃木至朗「中世～近世の東南アジア史と東北アジア史をつなぐ／くらべる―歴史学と歴史教育を刷新する試みの一例として―」「東南アジアと東北アジア：複線的歴史と多元的文化の再検討」シンポジウム，2010 年 2 月 23 日，九華山荘（北京市).

⑨ 桃木至朗「理系のための歴史―アジアの海から見直す日本―」科学カフェ京都 10 月例会，2009 年 10 月 10 日（招待講演），楽友会館（京都市).

⑩ MOMOKI Shiro “How Can Research and Education in the History of Vietnam and Southeast Asia Develop in Northeast Asian Countries?: A Case Study in Japan” Third International Forum on Historical Reconciliation in East Asia: Promoting Interest in and Understanding of History of Southeast Asia including Vietnam，2009 年 8 月 28 日，Sejong Hotel（ソウル).

⑪ 中村薫「世界史教育の課題と今後への提言」第 45 回総合歴史教育研究会，2009 年 8 月 23 日，茗渓会館（東京都).

⑫ MOMOKI Shiro “Revitalizing Historical Research and Education: A Challenge from Osaka” Plenary Panel Session: Educations of World History: A Comparative Perspective, 1st Congress of AAWH (Asian Association of World Historians)，2009 年 5 月 31 日，大阪大学中之島センター.

〔図書〕（計 3 件）

① 桃木至朗，大阪大学出版会『わかる歴史、面白い歴史、役に立つ歴史―歴史学と歴史教育の再生を目ざして―』2009 年，270 頁.

〔その他〕

高大連携東南アジア教育ホームページ
http://koudai-tounanazia-ed.blog.so-net.ne.jp/archive/c2300604254-1

６．研究組織

(1)研究代表者

青山　亨（AOYAMA TORU）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：90274810

(2)研究分担者

桃木　至朗（MOMOKI SHIRO）
大阪大学・コミュニケーションセンター・教授
研究者番号：40182183

中村　薫（NAKAMURA KAORU）
芦屋大学・臨床教育学部・教授
研究者番号：80369719